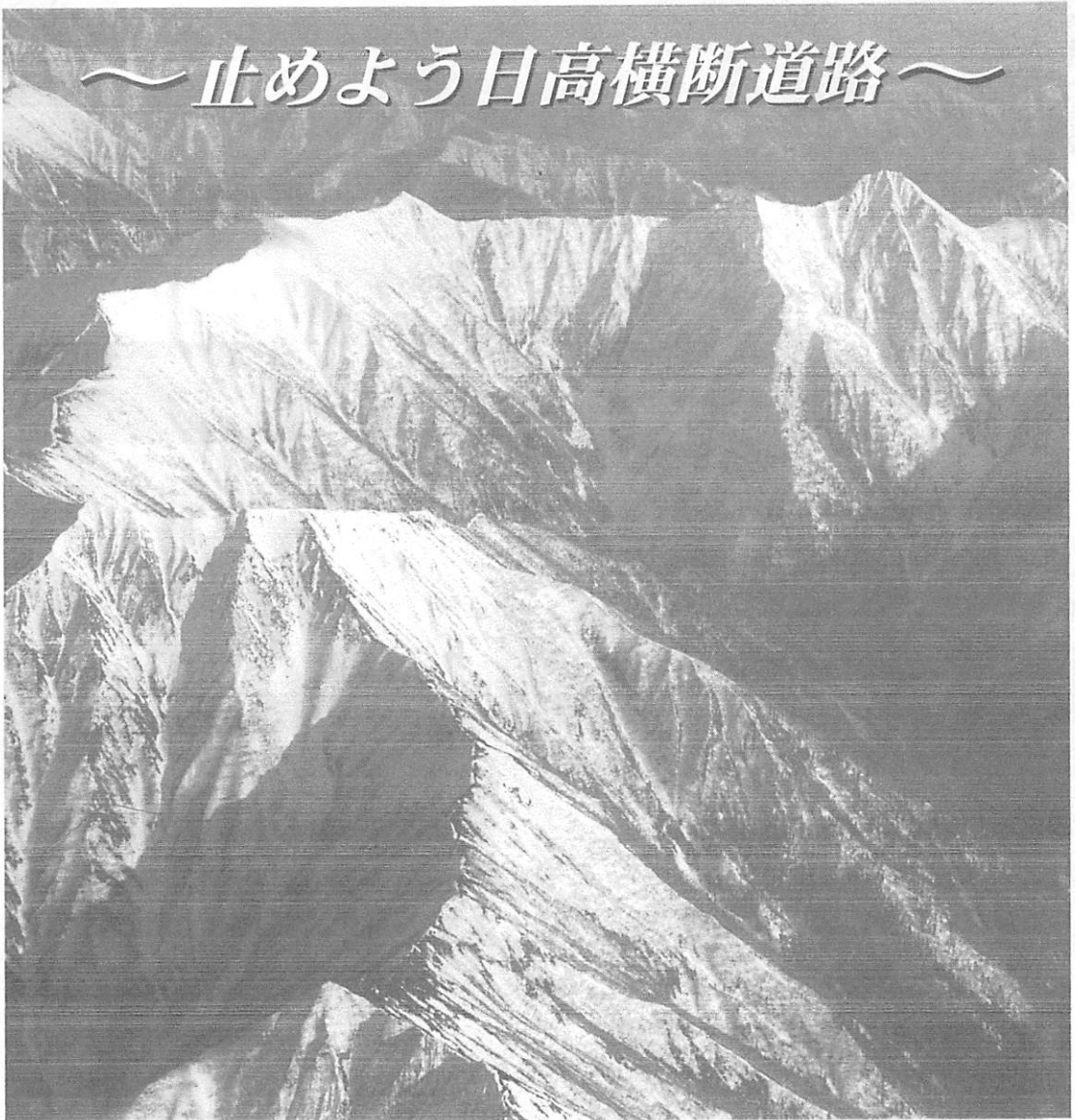


北の自然

北海道自然保護連合通信

No. 67 2002. 5. 25

～止めよう日高横断道路～



1,823m峰上空よりヤオロマップ岳1,794mおよび1,839m峰（右）を望む

自然破壊だけの日高横断道路

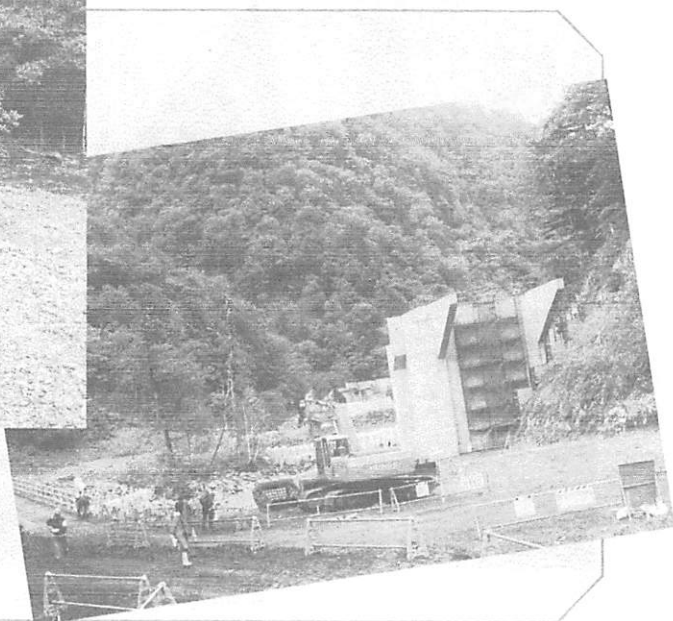
(十勝側 七の沢の工事区域)



豊かな原生的川と
河畔林



破壊・消失した河畔林の生態系
に対する影響ははかりしれない



を昨年9月に結成し街頭に職場に道路計画反対とカンパを呼びかけ、10万人署名の達成を目標に全国に運動の輪を広げています。5日から始まった環境週間に先立って、日高山脈の写真展を帯広、札幌、東京で開いたのをはじめ、「日高山脈中央横断道路を考える」シンポジウムなど、各地で日高の真の姿を理解するための講演会、集会、写真展など企画しました。

日高の道路の現状は、環境影響評価に対する検討委員会（委員長・北大伊藤浩司）の報告が大詰で調整に手間どっていますが、この17日指定申請を諮問した国定公園についても、来夏以降に指定が伸びること、更に帯広市が中心になって推進している「札内多目的ダム」が予定ルートとダブルことから、道路との調整がまた難航し、28日招集の道議会に提出予定の道々昇格認定を見送る結果になり、問題はよいよ混沌としてきました。

青々と続く麦畑の彼方、沢筋にほのかな残雪をみせて十勝ボロシリ、札内の峯々はそんな浮世の事は知らぬげに、緑深い夏山の魅力を発散しています。

かつて、アイヌ民族が自然と一体の生活をしていた蝦夷を奪った和人は、道を開くことによって文明を定着させてきましたが、とどのつまり無策な農政と都市中心の金権政治の相乗効果として、過疎がもたらされました。すなわち、道路をつける開発行為は、過疎を助長し歴史に逆行することになりました。

ところが、自然保護に反対する中札内村企画室長らの言によると「ルートに高山植物など全くない。自然保護を叫ぶ人は一木一草魚一匹増やすことも無く、村民の悲願を踏みにじり、将来の生命線である道路に反対する。上札内は廃墟と化している。秘境を荒らすなんてことは考えられぬ。」、さらに、かつて開発局職員で大雪縦貫道路に反対した同村吉田勇治氏は「対話を深めて相互信頼のうえに事にあたれば、自然破壊も解決し、投資効果があがらないところでも、一部住民感情を優先させるべきで、砂防ダムの完備により日高および札内川を自分たちのものにできる」と道路促進論を唱えています。骨抜きにされた環境庁のアセスメント法案を遺産、建設省らの圧力で流してしまった国の意向をうけた道は、土木部の横断道路と生活環境部の国定公園を調和させるべく力関係を發揮しているそうです。この問題については、32関係機関官庁の了解をとっているとのことですが、私

たちが、いまひとつ、このルートが軍事目的を秘めているのではないかという疑問にもつながらのです。

道、開発庁、静内、中札内、帯広をはじめとする開発促進期成会は、なぜ自然保護に反対するのですか。あなたたちは、税金という公費を私物化していませんか。お役所は予算にそったプログラムの消化をして、公聴会も環境影響評価書の検討委員会もそれなりに積み重ねていらっしゃるようですが、それも私たちの税金の範囲から出ていないことを銘記して欲しい。私たちは、対道庁交渉（2月15日）のなかで「検討委員会の先生方に、お一人でも反対の意見があれば尊重します。」という自然保護課長の考えを確認していますので、評価書が隠れミノであってもけっして道道認定の愚はおかさないと思っていますが、検討委員会の中身を公にしたい。

私は、中札内の公聴会で一般公述人として意見を述べた一人ですが、席上司会者は、評価書の内容のみにとどめ政策には口を出すなと言われました。人が変われば住民との約束も忘れるお役所、選挙が終われば自分も国民であることを忘れる政治家の体質に、より良い指針を見出して反映しようとする考えが最初からないような気がします。それを律する法も精神もない日本には無理な注文なのでしょうか。

過酷な気象、地質の悪さなど自然条件については、八木教授（5月2日付け道新学芸欄）が述べておられますが、自然保護に反対する方々は、車道が開いてからの現地だけで、厳冬期の日高をご存知ない。検討委員会の諸先生は、物の真の価値観を教える学術の現場の方々と聞いています。見聞された真実の日高を報告していただきたい。土木資本に税金をまわし、そのなかでしか生きられぬ政治体質、公共投資の美名の下、道開発庁の存亡をかけた延命策のために、膨大な税金を無駄にする訳にはいきません。もとより特別会計の枠にはめられた国有林野事業の崩壊が元凶ですが、これによって地元の産業が進展するというのは一時的幻想にすぎません。一部登山者や自然保護グループのみの山城ではなく、日本国民すべての、貴重な原生的自然環境保全地域とすべき日高山脈だからこそ、あえて声を大にして申しあげたい。

いま自然破壊道路に反対の声をあげない人々に、日高の自然に親しみ、日高の歌をうたう資格はないと。

十勝の自動車ラリー 問題と住民訴訟

岩佐光啓

帯広畜産大学畜産環境科学科生態系保護学講座・十勝自然保護協会理事

国際格式の自動車ラリー「インターナショナルラリーイン北海道2001」が昨年9月12～16日（競技は15、16日）に十勝地方の八市町村の公道と林道の全走行距離約800キロメートル、競技区間だけでも160キロメートルに及ぶコースで開催されました。

このラリー大会は、毎日新聞社が創刊130周年記念事業として企画したもので、2002年のアジア太平洋選手権、そして2003年の世界選手権の十勝への招致につながるものです。

このラリー大会に対し、道自然保護協会と地元の十勝自然保護協会は、自然環境や社会に与える影響が大きいため、昨年3月末と4月上旬にそれぞれ反対を表明し、ラリーの中止を申し入れましたが、主催者側との話し合いは平行線のまま大会は強行されました。

今回のラリーで、特に問題となったのは林道での競技です。林道では時速20～40キロの目安速度が林道規程で定められています。しかし今回、陸別町、足寄町、豊頃町などの5箇所の森林で、林道を閉鎖した上で改造ガソリン車27台（計画では60台）高出力で排ガスを放出し、可能な限りのスピードを出してタイムを競う競技が行われました。この林道でのスピード競争において、林道沿いに出現する哺乳類、鳥類、両生・爬虫類、昆虫類などの動物たちへの衝突事故が予測されましたが、ラリー終了後、主催者側が1週間にわたって外部者の立ち入りを禁止したことから公正な立場の第三者が調査できないという事態になりました。

しかし予想された通り、コース逸脱による樹木の損傷、林道の損傷、観客による植物の踏み荒らしなどが各林道で発生しました。主催者側は、これらの多くを自ら作成した環境モニタリング報告書でも認めています。

このような環境破壊を引き起こすラリーに対して、道は昨年9月13日に2000万円の補助金支出を決定し、今年1月24日に地域政策補助金として300万円、3月11日にイベント推進事業費と

して1700万円をラリー大会運営委員会に支出しました。

北海道は、「省エネルギー・新エネルギー推進条例」で脱化石燃料を宣言しており、アイドリリングストップをはじめ、自動車の使用を抑制する運動を行っています。また、道は「北海道環境基本条例」において環境への負荷の低減を道民の責務とし、大気汚染の防止や森林等の自然環境の保全を施策の基本方針としています。

一方、毎日新聞社はこれまでの新聞紙面において毎週のように環境のページを設けたりして環境保全キャンペーンを張っており、「環境重視」の姿勢を貫いてきました。その新聞社が記念事業と称して森林の中で騒音と排ガスをまき散らし、砂利をはね飛ばして林道を削り、改造車を爆走させるというラリー大会をラリー愛好団体の企画に便乗して十勝に招致し、さらにこれまた「環境重視」を掲げる堀知事がこの企画にのって巨額の補助金を出してそれを招致・支援する一。まさに現在の車社会が抱える深刻な環境問題や社会問題を無視したイベントを新聞社と自治体が推進することに、ただ驚くしかありません。

今回の道による補助金支出に対して、十勝自然保護協会の理事5人が昨年11月19日に補助金交付決定の取り消しを求めて住民監査請求を行いました。北海道監査委員会は今年1月11日にその請求を却下しました。これを受けて、同協会の理事らは今年2月6日、北海道知事ら4人に対して地方自治法違反などで提訴し、補助金2000万円を道に賠償することを求める住民訴訟に踏み切りました。

このラリー裁判が、自動車ラリーの問題点、環境問題に対する哲学も倫理もなく、理念と行動の整合性をも欠いた一新聞社と道の姿勢、そして官と報道機関の癒着による環境破壊の実態と税金の浪費の構図などを世に浮き彫りにしてくれることを期待しています。



▲ 損傷された木



▲ 林道を走るラリー車

・フォーラム「稲田の森を知っていますかー弥生新道を考える」から

「市民がつくる緑の環境」

2001. 8. 4 帯広畜産大学講堂にて

講師：今 泉 みね子

ドイツ・フライブルク在住の環境ジャーナリスト

私は10年以上前からドイツのフライブルクという町に住んでいます。日本の人にとっては観光都市というよりも環境都市としてとても名高くて、日本から毎年2千人以上、議員さんとかあるいは市民団体の方とか個人の方いろんな方が環境観光にいらっしゃいます。たまたま昔大学生としてもいてそのままそこに住みついてしましまして、いろんな日本の雑誌にドイツから環境報告ということを書いて過ごしております。

最初今から19年前に初めてドイツの景色を見た時はすごくきれいだと思ったんですね。ベートーベンの「田園」にでてくるのは正にこの景色だと。でもこれは自然景観ではなくて自然を一旦壊してそれから人間が造り出した景観なんです。それでも今の日本からいらっしゃった方はきれいとおっしゃるんです。きれいかも知れないんですけど、私から言うと、庭のようなきれいで、ドイツに住んでみて、しょっちゅう仕事で日本に来るようになって、日本の自然のすばらしさ、おもしろさ、雄大さ、多様さというものに初めて気がつきました。それは北海道の大雪山でもそうです。このすばらしさはドイツにないんですね。ドイツの自然景観はつまらないんです。なぜなのかと言いますと、一つは平らな部分が多いということもあるんですけども、やはり中世の時代に森を徹底的に壊してしまったからです。徹底的に壊してその後山の場合は山崩れが起こりますからあわてて植林したんですね。しかも、植林した時に元々森に生えていた樹を植えないで、日本の植林地と

同じだと思えますけれども、針葉樹のモミとかトウヒとかを植えてしまったので、つまらないものになって、それだけにそこに住む動物の数も種類も減ってしまったのですね。さきほどのスライド、ああいう景観を静かな景観としてきれいだということもできるんですけども、やはり日本にはまだまだもっと多様な雄大な自然が残っているということに初めて気がつきました。

それでもこの人間が造った森を、今ドイツ人は懸命に守ろうとしています。日本の場合、環境運動というのは公害から始まって水俣病だとか、今だとダイオキシンの問題だとか環境ホルモンの問題とか、どちらかというところ、環境が破壊されると人間が困るからやっと環境意識に目覚めたというところがあるんですけども、ところがドイツの場合は、森をまず守ることから始まったんですね。皆さんご承知だと思いますけれども、連邦の政権の連立政権の一つを担っている緑の党というのは、実は森を、さっき言ったこの人工林ですよ、大したことのない、生物にとってはそれほどすごい森ではないこの森が壊れてしまうから守らなければいけない、どうしたらいいんだろうというところから、市民が立ち上がって作った、それがきっかけでできたんです。今は、この党は外務大臣も環境大臣も出して、政権を取るくらいになったわけですね。だからこの点、ドイツはなんでもいいというわけではないとしても、森を守るまでして涙ぐましい努力をしているところは見習うべきところかなあとと思います。後でフライブルクその

他のスライドをご覧にいただけますけれども、日本から来てドイツはすごくきれいというのはわかるんです。どうしてかという、街がきれいなんです。街がどうしてきれいかという、看板がないとか自販機がないということもありますが、もう一つはやはり街の中に緑が沢山残っているんですね。その美しさを見てきれいだと感じるんじゃないかと思います。

この緑を守るためにですね、どういうことをやっていたかと言いますと、例えば、日本と違って自分の土地なら何でもしてよいというわけじゃないんですね。日本は山の安い土地を買って、そこを産廃処理場にしまったり、あるいは焼却場にしたりとか、そういうことがやり易い構造になっているようですけれども、ドイツでは議会が10年に一度土地利用計画を決定して、たとえ人の土地であってもですね、個人の土地であっても、ここは本当に宅地にすべき土地であるか、ここは草地として残すべき土地であるかということをお話し合います。議会で話し合うだけでなく、その時に今度市民が参加するとか、別に参加して下さいと言われるわけでもないんですけれども、市民の側からこういうフォーラムをしょっちゅう開いて、あるいは新聞が紙上でそういう新しい土地利用をどうするとかディスカッションを持ち出して、そこに色々な人が積極的に参加します。丁度、私の住んでいるフライブルク市は、今新しい都市計画を造るところなんですけれども、ついこの間の新聞に出ていましたけれども、住宅地開発について、市の中にむやみに住宅地を造っても、住もうとしている人があるんだろうかというような疑問を、環境研究所の人が持ち出していました。車を推進しないで自転車、公共交通機関を推進する会という大きな団体がありますが、その団体も一緒になってフォーラムを開いて、本当に私たちはこの住宅地を必要としているんだろうか、稲田の場合でしたら、本当にこの道路を必要としているんだろうかということをお話し合います。そうすると市役所の人も建設関係の人も、それじゃまた考え直そうかということになります。それから市議員にも働きかけて、できるだけ多くの市議員がこの新しい土地利用計画はよくないというように持っていく後押しをします。

(スライド映写に入る)

これは、市の真ん中にある小さな広場で、その隣が博物館なんですけれども、今はこのように緑の樹が12本生えているんです。これらの大木のまわりが児童公園になっているんですけれども、この博物館の保管庫を地下に造るという計画が今あって、その保管庫を造るには12本全部伐ってしまう、それに対して市民は即反対しています。こちらは架空の写真で、こういうふうになっちゃあ困るという風に示していったんですね。これが今の12本、その12本を守るために即6千人の署名が集まったそうです。ちょうど北大のポプラが12本で、春に6千人の署名が集まったんだそうです。ちょうど同じなんです。やっぱり6千人の署名が集まって、夏休みの子供たちに働きかけて、子供の署名も有効ではないかと主張しています。こういうことを働きかけると、(その反応が一寸書いてあるんですけれども)市の建設課の方も、それじゃもう一度考えようといひます。また市民の方でも安心できませんから、市議員一人一人に手紙を送りつけて、この案に賛成しないようにと訴えます。ここで問題なのは、じゃあどうするのか、他の方法はないのかということをお話し、また市民の側も代替案を出してきている点です。いつも反対というのではなくて、なぜこれが必要なのか、なにもこうしなくてもいいんじゃないか、他に替わる方法もあるではないかという風に、積極的に働きかけて参加していく姿勢だと思います。その他の一寸した例を説明したいと思います。

これは私が住んでいるフライブルクの町全体です。周りは平らな所と、山が少しあります。あるといっても一番高い所で1200mです。日本からみれば丘みたいな所で、先ほどの小野先生のスイスの写真と似ていて、こうやってずうっと牧草地が入り込んでいて、所謂耕作景観といひますか二次景観なんですね。街の中はかなりまだ森が残っていて、昔は一面全部森だったんでしようけれども、それを壊してこうやって樹が出来上がったわけなんですけれども、こういう人工湖の周りも樹を植えてもう一度生物が住めるようにしたり、それから浄水場は特に森を残し一部だけを開発して宅地にしたいという、普通はそれでも市民団体から見れば、これはもう緑がなくなってしまった、これ以上は一つも壊してはならないと思っている人が多いんです。日本から見ると、これだけあるんだから一

すぐらい伐ってもいいじゃないかと言いたくなるんですけども、やはり森の好きな市民にとっては、それでも少なくなったんですね。

森が酸性雨で枯れるであろうという警告がもう70年代に始まったものですから、森を守るためにどういうことをしたらいいんだらうということが考えられました。

高速道路が西の方に走っているものですから、そこから排気ガスが来てしまう、それに対しては市ではなんにもできない、だけれど市でできることはなんでもしようとされました。これも最初は市民がまず働きかけてできました。

街の真ん中ですけれども、ここは自動車が通っていないで、路面電車とバスの一路線だけです。市の繁華街の中心地の600m四方くらいなんです。その外に交通対策として、使わなくてもいい所は車はなるべく使わないで排気ガスをできるだけ出さないようにする対策があります。空気が酸性化したり、それからオキシダントが増えたりしないようにして森を守りましょうというわけです。

日本からわんさか視察にいらっしゃるほど有名になった交通対策です。フライブルクは早くから始めたんですけども、今では、ドイツの色んな都市の真ん中が、こうやって車の侵入を防ぐようになりました。

また、公共交通機関を使ってもらうために共通切符を造り出したんですね。その共通切符で周囲の町村の交通機関にも全部乗ってしまうような定期券です。これも最初は市民が、こういうアイデアがスイスにあるからとドイツでもやったらどうかと言って始めるようになった。そのおかげで、今ではドイツ中にこういうシステムができて、もう今はこれがない方がおかしいようになりました。これも、最初の動機というのが森を守りたい一心からなんですね。

これは、住民参加の例です。

新しく空いた土地ができた時に、それをどうしようかということ、これまでだったら都市計画課の人たちだけで、これは宅地にするとか何にするとか色々決めるんですけども、この10年くらいに、そういうところへ市民が口出しをするのが普通になってきました。この場合は、最初からそこに住みたいなあ、自分は買え

ないけれども借家してでも住みたいなあと思っている人が集まってフォーラムを作って、最初の都市計画から市と一緒に計画に参加して実現させたんです。この場合も大きな樹齢80年以上の樹が地区内に沢山あってそれを全部残すことに成功しました。

ちょうど右側に見えているこの所に小川が流れているんですけど、これも全く手を入れないで、護岸工事もしないで、その小川の脇に大きな樹がずうっと生えているんですけども、それもそのままにして、ここから30m小川から離してここから建てることにして、目一杯建てることはしないで宅地開発をして、全ての樹を残すことに成功しました。市民が初めから都市計画に加わっていたから成功したわけです。

そういう口出しをした人は、自分たちのわがままのためだけで言っているのではありません。たとえば、自分の家を建てる時も、木造にして太陽の燦々と降りそそぐ光を利用して昼間は電気を使わないでできるようにしたり、あるいは昼間は入った暖かさが夜北側から出ていかないように、全部断熱材で包みこんで、殆ど暖房がいらないようにしたり、それから屋根にはソーラー発電装置をつけたり、ソーラーの温水装置をつけたり、なるべく自分たちもCO₂を出さないで暮らすようにします。庭にはコンポストをおいて春には堆肥にしてまた元の庭に戻してやるという風に工夫をして、自分たちもできることを工夫・実行しながらやって行くことを始めました。

これはフライブルクの街の真ん中の公園で、このごろはこういうのが街のトレンドになってきているんですけど、遊具が殆ど見られません。自然の素材が遊具の代わりなんですね。これは危ないという理由で伐られてしまった街路樹の幹を、何本も土にさしてジャングルジムの代わりにしたんです。児童公園というところは舗装化されているんですけども、舗装は一切しないで地面と土にして、そこに丸太が置いてあって、それをベンチの代わりにしています。ジャングルジムとかすべり台などの人工的なものは置かないで、子供がこの辺で砂遊びをしたり泥遊びもできるようにしています。ブランコも自然素材を使って、後は板切れとか石ころとかを置いて、子供たちに自然素材を与えているの

です。都市の真ん中ですと自然に触れ合う機会がなくなってきたものですから。

これはもう一つの理由があって、この方が経費が安いからなのですけれども、それによって一石二鳥、子供たちが自然にふれることができ、市の方もメンテナンスが楽になります。今はどんどんこのタイプの公園が増えていって、そのおかげで町中でも緑地が残ります。

今度はフライブルクから30kmくらい離れたメルディンゲンという小さな町です。ここは小さな山の麓にあって、ワイン用の葡萄を作っている所なんですけれども今では農業で食べていけないので兼業になってしまって、市民の職業が農業から離れてしまって、そのために子供たちも、自然の中に住んでいるんだけれども自然とつき合う機会がなくなったそうです。そこの町の小学校の校長先生が始めたこと、20年以上も前から始めている活動です。

(ちょっと帯広に似ているような気がするんですけど) こういう水路、川というより水路に、普通は水が流れていると周囲に樹が生えているものなんですけれども今は樹木がないんです。しかも一直線になってしまっている。向こうに森がありますけれども、途中で畑があって農薬を撒くものですから、動物が向こうからこっちにこれないんですね。緑の回廊がなくて分断化されてしまっている。こういう所が畑のあちこちにあって、本当に森が分断化されているということに校長先生は危機を感じました。一方では子供たちが自然から離れてしまっているということにも危機を感じている先生は、この二つを一緒にして、子供たちが何か環境に対してしたいと思った時に、実行できる手立てを教えてあげたいと思って考えたのです。

じゃあということで、今度はみんなで樹を植える。最初はその先生の受け持っている学校の子供達、後からは他の付近の学校の子供やおともも来るようになったんですけれども、皆で樹を川の縁に植えてきました。

これが今の姿です。先ほどお見せした何もなかった所が今ではこんなにずうっと向こうの森からこちらまで全部つながるまでになっている。これを見ていたお百姓さんたちは、最初は何やっているんだと反発しました。やっぱり農

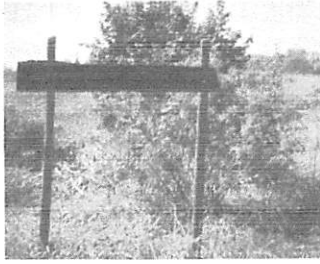
家の人という自然保護と聞くとふんと思うんですね。何か邪魔されるような気がしていたけれども、この川沿いに樹を植えてくれたお陰で、川に藻が繁殖しなくなってそのお陰で排水がよくなったんです。毎年川底を削るというお金がかかっていたんです。それがしなくても済むようになったということで喜びました。そこでお互いに土地を農家の人がくれて、そこにまたこうやって植林をどんどんしていって、今では6万6千本以上の樹が植わって、風にそよぐ並木ができて、外から散歩に訪れる人も出てきました。勿論植える樹については、昔この川にどういう樹が生えていたかを調べて、元々生えていたヤナギとかナラとかそういう植物を植えました。お陰で緑の回廊ができました。

もう一つ先生がやったことというのはベニエの垣根というのです。ベニエという人が発明したものでなんですけれども、枝打ちされた枝は昔は燃やしていたり、あるいはコンポストに捨てたんですけれども、このいわば廃棄物を皆で子供たちと引っぱってきて冬の間はずうっと組んでいって、風がこう吹いていると抜けるように、高い、そう2mくらいの枯れ枝の垣を造るんです。ここが鳥の住みかになったり、ハリネズミの隠れがになったり、それからその間に小さな苗木を植えておくと、鹿とか兎とかの食害から免れることとなります。乾燥からも守られるから水遣りをしなくてもよくて、それから風からも守られる。枝は枯れて最後には栄養になりますから、間に植えておいた苗木がそれを栄養にして、それから守られながら育っていくという考え方ですね。



これはもうそれから3年経ったところです。枝がこれぐらいになってしまった。殆ど見えなくて、その間に植えておいたこれは灌木ですけど、例えばハマナスみたいな低木が育ってき

たわけです。ですからこれも向こうまで回廊ができた。分断されていた向こうの森とこちらの方が、この低木地帯で結ばれるのです。ここの所は何もしないようにして草原にしておいて、緩衝地帯になっています。

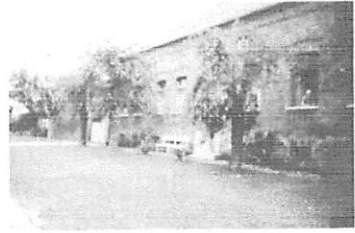


これはもっと育った姿で灌木はもう随分大きくなった姿で、もう殆ど最初に組んだあの2mくらいの高さの垣根が見えなくなっています。こうやってどんどん増やしていきます。小さな努力ですけれども、このことによって寸断された森が子供たちの手によってまた結ばれるようになります。

森が結ばれていくところで、こういう所で結んでいくことができるわけです。これがなかったら大変なわけです。まわりは麦とかトウモロコシの畑で農薬が撒かれていますけれども、そのような森を取り戻そうという活動には、環境教育の効果もあって、子供たち自身が森というもの的大事なんだ、それから、森を自分たちの手でも少しはお手伝いできるんだということ、そして森には、自然の中はゴミというものがない、枝が土の中に環ってそこから新しい木が育ってくるんだということを、自分の作業を通して学ぶことができます。

先ほどの帯広の環境基本計画を読ませていただきましたら、帯広の自然、生物圏の保存地域のプロジェクトに、従ってやっていくということが書いてあったんですけど、これはちょうどその例です。ユネスコの自然生物圏の指定を受けている一つの東ドイツの（統一前の旧東ドイツ）村なんですけれども、ここはコウノトリが沢山訪れるようになった村で、観光で食べていけるようになりました。ここは昔はコウノトリが三つがいくらかいしか年に繁殖しなかった。アフリカから4月に来て8月に帰っていく、その間に繁殖するんですけど、三つがいしかなかった、それを町の人たちが屋根の上に台座を造ったりしてお手伝いしたところ、コウノトリが沢山来るようになり、観光としても食べて

いけるようになった。増えるようにした陰には、例えば電柱を全部なくして電線を地下に埋め



たり、農業を全部無農薬にしたり、観光で有名になったからといって道路を増やしたりしないで、街の真ん中への車の乗り入れを制限しました。これは歩道、歩道は全部芝生なんです。そこに街路樹をずうっと、昔の品種の洋ナシを植えて、食べられる街路樹にしました。そして真ん中は駐・停車は禁止にしました、全部。年間7万人来るんです、観光客が。それでも、車で入って止まってコウノトリを見ようなんて人ができないように、駐・停車を禁止にして、村民にもそれを当てはめました。村民は皆受入れたそうです。これを考えたのは村長さん自身なんです。村長さん自身がそういうことをして守って、車が入って来たら大変なことになるんだからと。それから決して観光センターなんて造らないように、小さなハウスの観光センターを造ってそこで地元の人がガイドを引き受けて、なるべく行かないようにしました。

昔の伝統的な大きな果樹園、プランテーションでなく、集中栽培でなく、広々とした草地に大きな果樹が生えるような、昔からある果樹の草地を残したり、それから50ha以上の森がエルベ川の河畔にあるんですけど（一寸帯広に似ています）、その河畔林から広がる森は、全部ユネスコの保存地域に指定されています。そこを全部守って、白いコウノトリだけではなく、ナベコウという黒いコウノトリを守っています。ナベコウというのは人間に少しでも姿を見られたら繁殖を止めちゃうというくらいシャイな鳥なんです。村長さんは毎日3時に起きてナベコウが繁殖する50ha公園地を守っているんです。全く昔の森のまんまです。湿地があってもきれいで思わず入り込んでいきたくて、私もあそこにナベコウがいるんですよと言われて見たらぽつんと見えたんですね、黒が。私、おおとか言って行こうとしたら、村長さんに止めた方がいいですよと言われました。村長さんは毎日3時に起きて、ここに踏み込もうとする人がいないように見張るそうです。研究者にも

「あなたが研究するよりも、あのナベコウがち
ゃんと幸せに営巣して繁殖してくれることの方
が大事なんだから」と言って厳しく止めてしま
う。それまでにして守る一方では、観光客をう
まくガイドして、普通のコウノトリは見られる
ようにしたり、自然観察会の講演をしたりして
います。すばらしいと思ったのは、短期間にお
金が入ることだけを選んだのではなくて、村民
と長くコウノトリを大事にしながら、村の宝で
ある森を守っていくにはどうしたらいいだろう
ということを相談して、観光業者のいいなりに
ならないできたところです。

この帯広の環境基本計画を読みますと、そこ
にもちゃんと「帯広のコア・エリア計画は世界
規模で行われている生物圏保存地域の考え方
を、帯広の環境の現状と規模とを考慮しながら
再々構築した計画であるとともに、推進を…見
直しを計っていく計画である」と書いてある。
帯広だってやったっていいわけですね。帯広の
場合は、先ほどの説明によりますと、実際見ま
すと森が寸断されているわけですから、伐るな
んとんでもなくて、逆に広げる外ないわけ
で。そういうことはただ市に駄目じゃないかと
いうだけでは、私が見聞きした経験によります
と駄目で、必ず私たちと一緒にやりますからや
りましょうよと言った方が成功します。

それからもう一つは、本当に必要なんですか
ということを知ることですね。本当に道路
があるんだろうか、日本は往々にしていら
ないものを作るんですね。ゴミがふえれば焼却
炉、ドイツの場合はゴミがふえればゴミを減ら
します。日本では電力需要が上がったから原発
を造りますが、電力需要が上がったら下げれば
いいわけ。そういう見通しがいいわけではない
わけで、冷房が効きすぎるデパートとか、つけ
っぱなしの自動販売機など節電方法は一杯ある
わけですから。水利用が大変だからとダムを造
るよりも、水利用を減らせばいいわけですね。
道路も本当にいるんでしょうか。本当に自動車
で行かなきゃいけないのかしら。自転車とか外
の利用方法はないのだろうか。市役所だけでな
く市民の方から提案したらどうでしょうか。市
民バスを創ったらどうですかと色んな提案を
していくことができるのではないのでしょうか。私
はよそ者ですから勝手に言ってますけれども、
ドイツの例を見ますとそういう傾向がきていま
す。

帯広はすばらしいんですよ。イクレイの会員
だということをご存知ですか。国際環境自治体
協議会といって、国際レベルで自治体同士手
を取って環境にいいことをやっていきたいと思います
という組織です。カナダから始まってヨーロッパ
はフライブルクが事務局で、日本にも事務局が
あるんですけども、自治体でこの会議に最初
に名を挙げたのが北九州市と山梨県と帯広市な
んです。これは随分昔の話なんです。帯広は早
い時期から環境意識が高かったはずなんです。
ですから、今こそイクレイの会員としてもヨー
ロッパに負けないような、市民運動、それから
都市計画をなさったらいいと思います。最終的
には皆さんが自分の故郷を愛するかどうかです。
全体的には皆さんの決心次第お心次第です。

今日は小さな例ばかりお話ししました。これで
終わります。

今泉みね子氏 ————— 略 歴

翻訳家、環境ジャーナリスト
東京生まれ、国際基督教大学教養学部自然科学
科卒業

1983年より1986年まで

ドイツ・フライブルク大学留学

1990年より

フライブルク市に住む。ドイツ語・英語
の著作物の翻訳。ドイツ語圏をはじめと
するヨーロッパの環境対策に関する調
査、執筆、講演に従事。

● 主な著書

「ドイツを変えた10人の環境パイオニア」
白水社
「ミミズのカーロ」
合同出版

● 主な訳書

「環境にやさしい幼稚園・学校づくりハンドブック」
中央法規
「環境マネージメントによるコスト削減」
白水社
「オオカミと生きる」
白水社
「ソーラー地球経済」
岩波書店

北海道自然保護連合の代表交替

稲田孝治氏から寺島一男氏へ

(5月11日代表者会議で決定)

多様な運動のネットワークを

寺島一男

大雪山の雪解けが異例の早さで進んだ。喜ぶべき早い春に不安を感じるのも、温暖化の影響を実感するからであろう。環境はもはやあらゆる分野でキーワードになっているが、今後もその問いかけと意味はますます重さを増すに違いない。

国土面積に二割強を占める北海道。そこに残されている自然のあり方は、国内はもとより国際的にも“環境の世紀”を問う、一つの指標になっている。つまり、北海道に住む私たちの意識や生活、運動が試されていることに他ならない。

北海道自然保護連合は、その前身を含めると今年で発足28年になる。大雪縦貫道路問題を契機に誕生し、この間大規模林業圏開発問題、日高横断道路問題、士幌高原道路問題、知床国有林伐採問題、千歳川放水路問題など、全国を揺るがす大きな自然保護問題に取り組んできた。

その結果、大半の計画を中止、変更させるなど大きな力を発揮して自然保護運動の礎を築いてきた。この原動力となったのは、いかにも紋切り型の言い方だが、道内各地に散在する加盟

団体のねばり強い戦いと結束力の強さ、そしてそれを支援してくれた全国の熱い力である。

しかし、今にして思うと、当時、自然保護の声は世論としてはまだまだ小さく、道内の自然保護団体も数えるほどしかなかった。“非力の力”が自然保護運動を鍛え、数多くの運動を生むエネルギーになったのかもしれない。

現在、道内の自然保護団体や環境問題に取り組む団体は、数え切れないほど数多くある。その活動内容も取り組む人々の意識も実に多様だ。この多様性こそが運動の広がりとなり盛り上がりをつくっている。

“危機の時代”に臨んで、この運動がいかに安定し成熟するかは、いかにうまくネットワークをつくるかにある。地域で活動する様々な運動が広く手をつなぐほどに、運動の主体性と独自性がつくられていく。北海道の自然保護運動の課題もそこにありそうである。

長年にわたってご苦労された稲田孝治代表に代わって、今年度から北海道自然保護連合の代表を引き受けることになった。“非力の力”を再びかみしめて頑張りたいと思っている。ご支援下さい。

退任ごあいさつ

稲田孝治

この度、身体の老化著しく(歩行不自由)、代表の任を果たすことが困難となり、退任させていただきます。

長期間、各副代表、事務局長、常務委員各位並びに各加盟団体、関係機関の皆様方の心豊かなご支援による任を務めさせていただきました

ことを、心から深くお礼申し上げます。ごさい。

各位の今後ますますの御発展と御健勝を御祈念申し上げます。退任のごあいさつといたします。

新刊紹介

十勝自然保護協会編

「然別湖の自然よ永遠に」

士幌高原道路建設反対運動の記録集

1999年3月に建設中止の成果を得た士幌高原道路建設反対の記録集が十勝自然保護協会から発刊されました。十勝自然保護協会理事ら28年におよぶ運動に関わった北海道内の人々が寄稿しています。第1部は、反対運動の歴史、署名運動、ナキウサギ裁判、文化財保護法違反の告発、風穴など及川前会長ら協会の理事が担当し

ています。第2部は会員や道内で反対運動に関わった人達が寄稿しています。第3部は資料が掲載され、詳細な資料年表と共に同協会のホームページに寄せられた全国、海外からの多数の意見が収録されています。

- サイズ B5判、203頁。
- 価格 1500円(送料別)。
- 問い合わせ TEL・FAX: 0155-42-2192
十勝自然保護協会事務局・佐藤

●表紙

写真 日高山脈 1,823m峰上空よりヤオロマ
ツプ岳1,794mおよび1,839m峰(右)を望む



北の自然 No.67

2002年5月25日発行

発行 北海道自然保護連合

事務局 札幌市南区川沿10条3丁目12-2
小山健二方

TEL・FAX 011-572-2069

発行人 寺島一男

印刷 東洋印刷株式会社(帯広)

賛助会費 年間 3,000円

郵便振替 0271-5-4071



秀岳荘

営業時間/A.M.10:00~P.M.7:00

定休日/毎週月曜日

札幌本店 札幌市北区北12条西3丁目 ☎(011)726-1235

白石区 札幌市白石区本通り1丁目南 ☎(011)860-1111

旭川店 旭川忠和5条4丁目 ☎(0166)61-1930

(専用駐車場完備)